

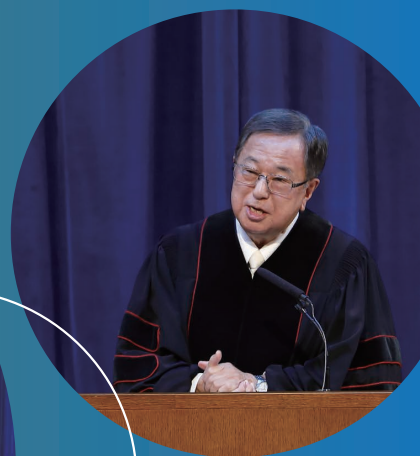
OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

March.2025
No. 67



14th KANTO GAKUIN



昨年10月12日、ベンネットホールにおいて 関東学院創立140周年記念式典を執り行いました

2部制で行われた創立140周年記念式典の様子を振り返るとともに、「一堂に会することの意義」を松田和憲学院長が語ってくださいました。

先達の歩みを振り返り 決意を新たにした「第1部」

1884年10月、横浜山手に創立された「横浜バプテスト神学校」を第1の源流とする関東学院は、昨年140周年を迎えました。10月12日には関東学院大学横浜・金沢八景キャンパス内のベンネットホールで学院創立記念式典を挙行。第2部では記念講演、ミニコンサート、懇親会を開催しました。



続き、松田和憲学院長が「約束されたものを仰ぎ見つつ」というテーマで説教をされました。松田学院長は新約聖書ヘブライ人への手紙11章より、主の言葉に従って、行く先も知らずに旅立ったアブラハムの「冒険する心」や生き方を紹介。かつて関東学院が苦難と葛藤の中、キリスト教を堂々と掲げ「中学関東学院」として設立された歴史と重ね、「当時の先生方はアブラハムと同じく冒険する心を持ち、行く先を知らずに出ていかれました。私達も揺れ動く社会の変化や目の先の損得に囚われずに、学院としての揺るがない一本筋の通った教育理念に立ち続ける必要性を感じています」と訴えました。また、校訓「人になれ奉仕せよ（その土台はイエス・キリストなり）」を道標に、聖書の普遍的な価値観に触れた学生や生徒が自らの人生を築き上げる手助けをすることがキリスト教学校としての使命ではないかと語りました。



規矩大義理事長

続いて、規矩大義理事長が式辞として「長い歴史の中で『人になれ奉仕せよ』の校訓にとどまらず、先達によって守られ継承されたものがたくさんあります。その一方で地域社会から信頼され、この地になくはない学校として、時代の変化に合わせて、より良い教育を目指して進化してきたからこそ今の今があると思います。140周年を振り返りながら、これからの自分という視点を通して学院を思い、未来に向けての努力を誓う場としてこの記念礼拝・記念式典があると思います」と挨拶されました。

新たな教養や芸術に触れ 絆を深めた「第2部」

第2部は、立教学院院长・立教大学総長及びキリスト教学校教育同盟理事長である西原廉太氏による記念講演から始まりました。テーマは「キリスト教学校として大切にしているもの、大切にすべきこと」。西原氏はまず関東学院のルーツや創設者らの足跡を紹介し、校訓から読み取る関東学院の教育の心棒を解説。「学校とは、工場のように計画的・均一的ではなく、一人ひとりと全身全霊で向き合いながら、手仕事の的に人になることや奉仕することの意味を伝え、肉とするものであることを、関東学院の140年の歩みから学ばなくてはならない。この校訓は全てのキリスト教主義学校が大切にすべきキリスト教教育の根幹です」と語りました。また、ご専門であるアングリカニズム（英国教会をルーツとする教会の神学）の精神や、12世紀頃のヨーロッパで

聖職者を生み育てる場として誕生した大学の起源など、幅広い観点から現代に至るキリスト教学校の使命について語り、来場者は興味深く聴き入っていました。続くミニコンサートでは、関東学院六



立教学院院长・立教大学総長
西原廉太氏による記念講演

浦中学校・高等学校ダンス部が元気あふれるチア、関東学院中学校高等学校ダンス（HULA）部が優雅なフラを披露し、来場者を楽しませました。ラストを飾るのはゴスペルシンガーのMARISAさんとキーボディストの山本裕太さんによるステージ。ダイナミックなピアノ伴奏とパワフルな歌声が会場を包み、最後の曲では来場者も一緒に唄って、盛大な拍手で終演を迎えました。その後は3号館の食堂に場所を移して懇親会を開催。多くの教職員や関係者が集い絆を深めました。この節目を新たな一歩とし、改めて関東学院の教育に尽力された多くの先達、関係者の方々に感謝するとともに、その伝統と使命を守ってこれからも歩みを続けてまいります。

創立140周年 記念式典を終えて

15年前、私が大学宗教主任だった時に迎えた学院創立125周年は、国内外から来賓を迎えてのシンポジウムや音楽祭など、いわば「外向き」のプログラムによる盛大な式典を開催しました。そうした周年行事ももちろん意味がありますが、コロナ禍を経て迎えた昨年の創立140周年では、学院に属する教職員が一堂に会することからこそ生まれる一体感を実感できるような、



「内向き」ながらも意義のある記念式典を遂行することができました。

わずか5名の学生でスタートした関東学院は、140年の時を経て、大学からこども園まで約1万5千人が在籍する学院へ成長しました。一方で規模が大きくなれば、教職員が互いの顔もわからないという状況も生じます。そこで、キリスト教に根ざした人間教育を担う者同士が、顔と顔を合わせて決意を新たにする機会となることを願い、今回のプログラムを企画しました。

節目を迎えるにあたり、私は学院の過去・現在・未来に思いを巡らせる中で、時代を超えてアブラハムのような「冒険する心」と、行く先も知らずに旅立つ勇氣を持った先達から学びたいとの思いを強くしました。フランス文学者の森有正氏は、アブラハムの冒険する心を評価するとともに、冒険の反語は「同化」だと述べています。長いものに巻かれるという同調圧力的な風潮が根強い現代社会において、自ら新しい世界へと踏み出す姿勢が大事ではないかと思い、礼拝の主題といたしました。

記念講演はかねてから交流のある西原廉太先生に依頼したところ、大変お忙しいにもかかわらず快諾いただき、幅広い見識に基づく貴重なお話を拝聴することができました。本年3月発行の「学院史資料室ニュース・レターNo.28」には西原先生の講演全文や、それを受けたチャプレンの座談会などが掲載されてい

ますので、ぜひこちらもお読みいただければと思います。

さて、創立140周年を契機として「関東学院ボランティアセンター」開設を目指しています。各校のボランティア活動を包括的に繋げ、校訓「人になれ奉仕せよ」を具現化する拠点として、今春から準備を進め、2026年度から本格的に稼働させたいと考えています。そして、来る150周年に向けて関東学院はどう歩むべきか、私は残された任期2年間でその方向付けをして、次の方々に託したいと思っています。キリスト教による人格の陶冶を大事にしつつ、名実ともに学院全体の総合力を高めて150周年を迎えられることを願っています。



学院史資料室ニュース・レター



学校法人関東学院 学院院长 松田 和憲

プリツカー賞を受賞した建築家・山本理顕さんが 母校の関東学院中学校高等学校で特別講演

「建築界のノーベル賞」と称されるプリツカー賞を昨年受賞した山本理顕さん。
若き日の集落調査の経験をもとに後輩達へメッセージを伝えました。

新たな関（しきい）の概念を取り
入れた建築手法で国際的に活躍

世界的建築家で、関東学院中学校高等学校卒業生の山本理顕さんが、昨年3月「建築界のノーベル賞」と呼ばれるプリツカー賞を受賞しました。プリツカー賞はアメリカのハイアット財団が1979年に創設した建築界で最も権威のある賞で、日本人受賞者は山本さんが9人目となります。

山本さんは1945年に中国・北京に生まれ、戦後まもなく横浜に移り住み、1958年からの6年間で関東学院中高で過ごしました。その後は日本大学や東京藝術大学大学院で建築を学び、東京大学生産技術研究所に研究生として入所。今年1月に逝去された建築家・原広司氏に師事し、世界各国の集落を調査しました。そして、住宅には公と私を曖昧に繋ぐ領域があることに着目し、「関（しきい）」と名付けて研究。その原理を設計に取り入れ、建築とコミュニティのあり方を問う作品を数多く発表し

ています。現在、横浜市内に株式会社山本理顕設計工場を構え、主な作品に横須賀美術館、横浜市立子安小学校、チューリヒ空港の複合商業施設「ザ・サークル」、韓国の集合住宅「バンギョ・ハウジング」など国内外で活躍。長年の活動が評価され今回の受賞に繋がりました。



代表作の一つである横須賀美術館

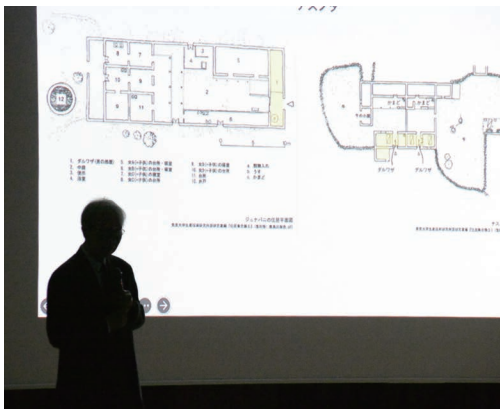
一緒に住むことをテーマに
自らの原点を中高生に講演

昨年12月9日、母校である関東学院中高のグレースット礼拝堂で、山本理顕さんの特別講演が行われました。講演タイトルは「リビング・トゥゲザー」。山本さんは約千三百名の生徒の前に、在校当時の思い出や、卒業後に建築家を目指して「建築とはどういうものか」と自問自答しながら、20代半ばで世界各地の集落を調査した経験を語りました。その中でも特にユニークな住宅として、アルジェリア、イラン、ギリシャ、イエメン、スペイン、ネパール、インドなどの事例を、写真や図面をスクリーンに投影しながら紹介。さらに、どの住宅にもパブリックとプライベートを繋ぐ空間があるとし、これを「関（しきい）」と名付けて「人が仲良く住んでいくために必要な原理」を研究してきたことや、その発見が自らの建築家としての原点であると語りました。そして、「皆



後輩達に語りかける山本理顕さん

さんは今、そういうことを見つめるために勉強しています。暗記したことを答えとするのではなく、暗記したことを使って自ら考え、発見的なものを見ていくことが大切です」と後輩達に訴えました。最後は質疑応答の時間を設け、「能登で被災者達が元気になる建物を作るとしたら、どんな建物にしますか」という生徒の質問に、「独居や老夫婦だけの世帯も多いので、仮設住宅ではなく、シェアハウスの建設を提案しています」と回答するなど、活発なやり取りを展開。生徒達にとっては、偉大な先輩の存在を実感し、自分達が今何に取り組むべきかを考える有意義な時間となりました。



集落調査した事例をスライドで紹介

プリツカー賞を受賞した時はどんな心境でしたか。

受賞は電話で知らされました。私の建築は強い社会性を持っており、賞には縁がないと思っていたので、嬉しいと同時に正直驚きました。審査委員長のアレハンドロ・アラベナ氏も非常に強い社会性を持つ建築家なので、私の建築に共感してもらえたのかなと感じました。

建築家として、現代の社会風潮をどう感じていますか。

時代が内向きになっているというか、プライバシーだけを重視した住宅や、莫大なコストをかけて単なるコンクリートの箱のような、閉鎖的で地域に貢献していない建築が増えていっていると感じています。この閉塞感をなんとかしたいと思っていますが、私なりに全力で仕事に取り組んでいます。



3月には関東学院大学の横浜・関内キャンパスでも講演予定の山本さん。今年80歳を迎え、制作意欲はなお衰えることはありません。現在は台湾で桃園市立美術館を設計・建設中であり、近隣では横浜・野毛に現存する日本最古のジャズ喫茶「ちぐさ」の再生事業が進行中。地下に旧店舗を再現したミュージアム、地上は演奏できる広場という斬新な設計にも注目です。



山本理顕さんの建築を探訪
横須賀美術館

横須賀美術館は山本さんが初めて手がけた美術館であり、関東学院の学生や生徒が訪れやすく、アートも自然も建築も楽しめるスポットです。背後に森、手前に東京湾という観音崎の自然と一体となった低層の建物。外壁は、鉄板を塩害に強いガラスで覆うダブルスキン構造を採用しています。山本さんは「外観部分は建物の最上部にあたり、そこから地下に潜る展開が面白いと思います。内部の壁や天井に不規則に配置された丸窓からは、海や貨物船、レストランで食事をする人々などを切り取られた風景として楽しむことができます」と見所を語ります。ぜひ皆様も訪れて体感してみてください。



海側や山側へ抜けるアプローチ

ランダムに配置された丸窓が印象的



関東学院中学校高等学校 卒業生

建築家 山本 理顕さん

ICTと新時間割の導入で大きく進化した 関東学院六浦小学校の先進的な学びのシステム

2019年度より展開している独自の教育システム「六浦小モデル」。
進化した現在の学びや新たな展望について担当教諭にお聞きしました。

関東学院六浦小学校は、私のパレット・私のポケット・私のドアという3つの学びのシステムで一人ひとりの個性を伸ばす「六浦小モデル」を実践しています。2019年開始以降、毎年改良を加えていますが、特にこの2年間はICT導入による「学びの個別最適化」の定着と、時間割の大改編により飛躍的に進化しました。それぞれの担当教諭に学びの特色と今後の展開を聞きました。



私のパレット担当：筒井雄己先生
【毎日20分×ICTの自律的学習】
「私のパレット」は、こども達が自ら目標を定めて自律的な学びに取り組む時間です。少人数制を活かした選択型学習であり、全学年の時間割に組み込まれています。以前は週1回の授業として実施していましたが、今年度から時間割を大きく改編し、昨年度まで1コマ45分だった授業時間を40分に短縮した上で、昼休みと5時間目の間に毎日20分間「パレット・タイム」を新設しました。こども自身が何を学ぶのかを自ら考え選択することで、やる気や主体性が育まれますし、20分という時間も最後まで集中が切れない絶妙な長さです。さらに昨年度から導入した対話式ICT教材「すらら」によって、自分で難易度や方法を決めて学ぶことができ、個別最適な学びを実現しています。実際に何をするのかは学年やクラス、あるいは時期によっても様々です。私の



私のパレット担当：筒井雄己先生

クラス（4年生）で言うと、まず金曜日に宿題として、翌週のパレット・タイムでの学習計画を一人ひとりに立ててもらい、それに従って個別学習しています。常に目的を持って取り組むように指導していますし、テスト勉強をしたり、苦手な科目をあえて1学年遡って学び直したり、逆に得意な科目は上の学年の問題に挑戦するなど、すららで自由に楽しく勉強できるのが特色です。達成感を積み重ねることで課題発見や解決への意欲も養われ、毎日20分の効果は非常に大きいと感じます。また、以前は昼休み後に慌ただしく午後の授業に入っていました。今ではパレット・タイムがあることで気持ちを落ち着かせて、5時間目に向けてやる気のスイッチが入るようになりました。



個別最適な学び「私のパレット」
～毎日20分のパレット・タイム～

現在、さらにはパレット・タイムをメインに使用していますが、今後は日々の教科での活用を増やしながら、反転学習（自宅での予習を前提とする授業）にも取り入れたいと考えています。反転学習を行っている小学校はまだ少ないので、先進的な取り組みとして進めていきたいですね。

私のポケット担当：尾木征夫先生 【探究のサイクルで個性を伸ばす】

「私のポケット」は、自分の興味とことごとく追究する総合的な学習の時間です。他

校では学年やクラス単位で行われることが多い探究学習ですが、本校では1年間かけて個人で取り組んでいることが大きな特色です。研究テーマや活動場所も自由で、グループを組んだり、学年をまたいで研究することも可能です。いずれも全員がタブレット端末を使って成果をまとめ学年末に発表します。

で、人と違っていても良いんだという安心感や、ありのままの自分を認めてもらえるという自己肯定感を感じながら学べることもポイントです。3年生から実施していますが、こども達も活き活きと取り組み、学年を追うごとに内容や調べ方、発表もレベルアップしています。



スイス・ポーランド・タイの留学生と英語でご挨拶。
「私のドア」～また遊びに来てね！～

特に今年度より、それまでの週1時間から週2時間に増え、さらに深く探究できるようになりました。そこで、新年度からはより系統的に取り組めるような仕組みを考えています。2年生の段階から「プレポケット」として、上級生の授業を見学・体験したり、3年生の初期段階では1、2週間の短い期間で身の回りの「なぜ？」を調査して次に繋げるなど、より一貫した「探究のサイクル」を構築していきます。6年生では、その集大成として今以上にきちんとした形で研究成果を残し、そこで得た達成感を中高、大学でのより主体的な学びや自己表現へと繋げてほしいと思います。



私のポケット担当：尾木征夫先生

「私のドア」は、学校外の人や地域との交流を通じて、こども達が社会と繋がる時間です。日々の授業で得た知識を、広い世界での学びに発展させることを狙

私のドア担当：茂垣夏子先生 【本物の体験で視野を広げる】

「私のドア」は、学校外の人や地域との交流を通じて、こども達が社会と繋がる時間です。日々の授業で得た知識を、広い世界での学びに発展させることを狙

す。六浦中高で学ぶ留学生を招いた国際交流もその一つです。今年度はスイス、ポーランド、タイなどの留学生を招き、互いに自国の紹介や伝統的な遊びを教え合って異文化交流しました。大人ではなく、年齢の近い外国の方と出会う意味は非常に大きく、英語でもっと話したいというモチベーションが高まりました。大学との連携では看護学科との「いのちの授業」、陸上部によるマラソン大会に向けた練習サポートなど貴重な体験を実践しています。



私のドア担当：茂垣夏子先生

同校は六浦小モデルをさらに発展させるとともに、六浦ベルトの強化、そして英語教育においても新しいチャレンジを掲げて新年度で導入していく方針です。同校の先端的な教育に今後もご注目ください。



教科の枠を超えた総合学習「私のポケット」
～5年生の関東水族館～

理工学部がレストアしたオールド・ダットサンが エンジン再稼働と走行に成功し一般公開されました

日本の自動車産業の歩みを レストアによって紐解く

関東学院大学理工学部「先進機械コース」の武田克彦准教授らの研究室が、1937年製造の「ダットサン17型ロードスター」のレストア（復元）を行い、エンジンの再稼働に成功しました。このダットサンは横浜市在住の方から寄贈されたもので、武田准教授は、昨年3月に非常勤講師を定年退職された伊東和彦先生と共同で、約7年かけて学生とともにその動態保存をめざし、損傷の激しかったエンジンの部品の製造・調達や内外装の修復を実施。昨夏ついに横浜・金沢八景キャンパス内での走行を実現しました。7月14日及び8月3日・4日には同キャンパスで開催されたオープンキャンパスで一般公開。同車を起点とした日本の自動車産業の変遷や経済成長を紐解く資料とともに展示し、多くの高校生や保護者、一般市民がオールド・ダットサンを興味津々に見入っていました。



ダットサン 17 型ロードスター（1937 年製造）

レストアの経緯について武田准教授は、「モータージャーナリストでもある伊東先生のアイデアで始まりました。ダットサンは横浜で誕生し、日本で初めて量産に成功した自動車なので、関東学院大学にぴったりの教材です。そして、横浜在住の方が長年所蔵していたダットサンを学生のために寄贈してくださるという素敵な巡り合わせにより実現しました」と語ります。

エンジン設計に込められた 技術者達の熱き思い

レストアは、単なる修復にとどまらず、当時の技術水準やものづくりの思想、社会情勢を考察し、その視点に立って製品を再生させることに意義があります。今回のレストアでは、ダットサン独自の設計意図や技術者の思いが明らかになりました。

「ダットサンは当時、イギリスのオースチン7という車を模倣したのではないかと言われていました。そこで両者のエンジンを比較したところ、部品の寸法等には影響が見られるものの、設計の意図は全く違うことがわかりました。ダットサンには低燃費の自動車を目指そうという当時の技術者の意志がしっかりと感じられ、今の日本の自動車産業に繋がる第一歩になっているのだと感動しました」

エンジンの重要部品であるコネクティングロッドがジュラルミン製で、非常に



エンジンルームの様子

軽量かつ堅実な構造であることにも驚いたそうです。これについては、自動車産業の黎明期において、自動車を広く普及させるために耐久性よりも低コストを優先したのではないかと推察。量産を成功させ、大衆の手が届く価格で提供しようという技術者の思いが、今の私達が当たり前に自動車を使える時代に繋がっていることに深い感銘を受けたと言えます。

学生達がバトンを繋いで エンジン点火と走行を実現

レストアは7年以上の歳月をかけ、卒業研究として代々の学生達によって引き継がれてきました。エンジンの錆や腐食がひどく苦勞したそうですが、幸いにもスペアエンジンも寄贈していただいたので、二つのエンジンから使える部分を集めて組み立てることができました。また、クラシックカー愛好家や部品メーカーも、修復不可能な部品や貴重な文献を提供してくださいました。

「愛好家の方々は、若い学生がダットサンを研究していることを嬉しく思ってくださっていると聞きました。学生達の繋いだバトンが、最後にキャンパス内での走行実現にまで至ったことが本当に嬉しかったです」

エンジン稼働に成功した時のことを尋ねたところ、「実を言うと2階の研究室で



デスクワークをしながら（笑）。下の実験室から学生達がエンジンのクランクを電動工具でギュンギュン回す音が聴こえていたのですが、まさか火が入らないだろうと思っていたんです。すると15分後くらいに突然ガラガラッという音が響き、慌てて研究室から飛び出して下に降りていたら、伊東先生と学生達が歓声をあげていて、その瞬間は鳥肌が立ちました」と振り返ります。

赤い革張りの内装は、オリジナルに近い素材や色を探し、ほとんどの部分を学生が手作業で張り替えました。また、一見2人乗りに見えますが、トランクリッドを開けると補助席が現われ、最大4人が乗車可能に。この部分も今後さらに修復していく予定です。

温故知新で未来を切り開く 感性豊かなエンジニアを育成

こうして昨夏のオープンキャンパスでお披露目となったオールド・ダットサン。多くの高校生や保護者が途切れることなく訪れ、熱心に質問や撮影をしていました。また、寄贈者や伊東先生、卒業生も来場し、時を超えて蘇ったダットサンを嬉しそうに見つめ語り合っていました。今後は「学生達が気軽に見学できる場所に展示していただき、年に一回は走行イベントなどもやりたい」と語る武田准教授。卒業生など有志で動態保存の会を作り、長くこの車と付き合っていけたらと新たな夢を描いています。

幼い頃から車が好きな武田准教授は、学生時代より内燃機関及び代替燃料を専門に研究。エンジン技術を未来へ生き残

らせるための仕事に喜びとやり甲斐を感じていると言います。今回のレストアを通じて学生に伝えたかったことを尋ねると「温故知新です。今は最先端を学ぶことばかりに目が行きがちですが、古き良きものの本質をしっかりと学び、そこから新しいものに活用してほしい。先進機械コースは自動車メーカーや部品メーカーに就職する卒業生も多いので、この経験を活かし



関東学院大学 理工学部 先進機械コース 准教授

武田 克彦

日本大学大学院工学研究科博士課程修了。博士（工学）。財団法人日本自動車研究所を経て現職。現在は水素エンジンやCN燃料の研究をはじめ、自動車メーカーとLCAの共同研究にも取り組んでいる。



レトロでおしゃれなデザイン

て有機質的な、趣のある車を作ってくれたエンジニアになってもらえたら嬉しいですね」と笑顔で語りました。今後も関東学院大学理工学部は地元横浜及び日本のものづくりに貢献する技術者を育成します。

地域のハブとして子育てを支援するのびのびのば園 これまでの協働事業と成果を市民協働相談会で発表

子育てを軸にコミュニティを元気にするため地域連携に励む石井雄輝教諭。
園の活動例と昨年開催された市民協働相談会での講演について紹介します。

まち歩きから始まった 地域連携と居場所作り

関東学院のびのびのば園（以下のば園）は、幼稚園・保育園機能を持つ認定こども園として、「地域の全ての人がこども達の成長を笑顔で見守れるように」という方針のもと、地域との連携を深めながら子育て支援に取り組んでいます。石井雄輝教諭は2017年より地域連携担当を務めています。地域連携に「専任」の職員を配置している園は稀であり、全てが手探りの中、石井教諭が最初にしたのは「まちを歩くこと」でした。

「地域に根差したこども園として、何が必要とされ、何ができるのかを考えるために、まちを歩いて、地域の魅力や課題を把握することから始めました」

近隣の自治会や団地、商店街、学校などと顔を繋げていく中で、様々な立場ややり方で地域を良くしていこうと活動する人達がいることを知り、大きな刺激を

受けたと言う石井教諭。ある時、地区センターのフリースペースで、小中学生や高齢者が思い思いに過ごしている光景を見て、「こどもの居場所を地域にもっと増やしたい」と考えたそうです。そこで、園児の数が減る夏休みに園の一部を開放し、小学生以上のこども達が給食を食べべて安心して遊べる「のびのびの場」を開始。コロナ禍で一時的に中断したものの、年々内容を発展させ、企業や関東学院大学と協働したワークショップを開催したり、対象年齢を小学生から高校生まで広げて現在も続いています。

企業や地域団体と協働して 子育て世代をサポート

子育てやまちづくりに関する会合にも積極的に参加して信頼を築いてきた石井教諭。それに伴い、のば園も近隣のお祭りや催し物に出席したり、子育て世代に向けたイベントを園外で実施する機会が

も子育てを軸として地域に貢献したいと考えています。「日本全体に少子高齢化など課題がある中で、各地域のコアとなる人達が増えてアクションを起こすことで地域活性化が広がっていきますし、結果的に子育てしやすく、住みやすいまちになっていくと思います」と話す石井教諭自身も、いまや地域のキーパーソンの一人と言って過言ではありません。

市民協働相談会で発信し 地域連携の輪を広げる

昨年9月2日、横浜市庁舎内の横浜市民協働推進センターで「市民協働相談会」が開催されました。この日のテーマは「地域で繋がり、まちを元気に」。横浜市内で子育て支援を行う認定NPO法人びーのびーの事務局長の原美紀氏が協働コーディネーターを務め、ゲストとして石井教諭と、関東学院大学教育学部こども発達学科の三谷大紀准教授が参加し、のば園の地域連携事例と成果について講演しました。

石井教諭は、まち歩きから始めた経験やこれまでの地域や企業等との連携事業を、他の教職員の補足説明を交えて紹介。地域と繋がりを築くことで新たな賑わいが生まれ、地域活性化に結び付いていくことや、のば園の取り組みの意義について論じました。

続いて三谷准教授は、石井教諭の実践経験には多くの学びがあるとしながら、園と地域の関わりを考える上で重要な二



自由な発想でエコバッグにお絵描き

増え、地域での存在感を高めていきました。無印良品 港南台パークズと協力した「エコバッグ作成ワークショップ」、関東学院大学栄養学部と連携した「親子で作る簡単レシピ集」の作成・配布及び体験クッキングなど、今では定番化した活動も少なくありません。

一昨年の夏は新たな取り組みとして、野庭ショッピングセンター内にある地域活動拠点「なごみのば」と広場を活用し、企業や商店街等と協力して「えんにちあそび」を企画。輪投げやヨーヨー、さか



栄養学部や無印良品と協働した親子クッキング体験

な釣りなどの縁日コーナーや、タンバリン作成ワークショップなどを実施しました。「コロナ禍の影響で地域のお祭りを知らずに育ったこどもが増えているので、まちの中心にあるショッピングセンターで親子が楽しみながら地域に愛着を持ってもらえるようなお祭りを開催しました」と石井教諭。2回目の昨年は規模を広げて「えんにちあそび&盆踊り」を実施し、約千五百人が集まる盛況ぶりでした。野庭地域の新たな夏の風物詩として今後も継続していきたいそうです。



スーパーボールすくいを楽しむこども達

夏のえんにちあそびには多くの親子が来場



再開発を目指す野庭地域に 子育て世代を増やしたい

竣工から約50年が経過した野庭団地を有する野庭地域は、人口減少や高齢化が大きな課題です。一方で、団地内には緑道やショッピングセンターがあり、自然や公園も多く、子育てしやすい環境が整っています。市営住宅の再開発プロジェクトにも参画し、官民一体となった地域再生に向けた活動に携わることで、のば園



市民協働相談会の様子

つの視点として、こどもの遊びや園の保育に地域を活用すること、こどもの存在や園自体が人々を繋ぎ地域を活性化していくハブ（拠点）になることに言及。多様なものや人との出会いにより、こどもが地域に、あるいは地域の人達が園やこどもに親しむ機会が生まれ、地域が賑わっていくのではないかと保育学の観点から解説しました。

後半はグループに分かれて意見交換を行い、参加者からは「協働を考える上で

のヒントになった」「地域を俯瞰的に見ることから始めたい」など前向きな感想が寄せられました。石井教諭は「自治会、市民団体、幼稚園、保育園、企業、行政と多様な職種の方が集まってくれました。参加者同士の交流や、今後のアクションのきっかけになってくれたら嬉しく思います」と手応えを得るとともに、園として情報を発信していくことの必要性を実感したそうです。

最後に石井教諭は、「のば園にとって大学と一緒に活動することは大きな強みです。今後も関東学院のスケールメリットを活かした地域活動を広げていきたいですね。そして、地域と地域を繋ぐ架け橋のような役割を、のば園を含めた多くの幼稚園・保育園・こども園が担っているよう働きかけていきたいと思っています」と抱負を語ってくださいました。縦横の連携を強化して子育て支援に取り組むのびのびのば園にこれからも注目ください。



関東学院のびのびのば園

地域連携担当 社会福祉士

石井 雄輝

関東学院大学よさこいソーランサークル「誇咲」が 第33回YOSAKOIソーラン祭りで複数の賞を受賞

昨年、国内最大級のよさこいイベントで受賞した「誇咲」。その活動やよさこいの魅力について代表者2名にお聞きしました。

国内最大級の祭りで躍動 高い評価を獲得

1954年に高知県で始まったよさこい祭りは、「鳴子」と呼ばれる木製の鳴り物を手に、華やかな衣装を着た踊り手達が隊列を成し、よさこい節に合わせて踊る夏祭りです。熱気と躍動感に溢れるお祭りは、やがて日本各地へと広まり、なかでも1992年から始まった北海道札幌市の「YOSAKOIソーラン祭り」は、よさこいとソーラン節を融合させ、今では全国最大規模に成長。大通公園をはじめとする市内各所を会場に、約270チーム、2万7千人の出場者、200万人の観客が集まる北海道の初夏の一大イベントです。会場によってステージ形式とパレード形式という2種類の踊りを楽しめることも見所となっています。

昨年6月5日から9日に開催された「第33回YOSAKOIソーラン祭り」に、関東学院大学のよさこいソーランサークル



代々受け継がれる大旗は咲き誇る桜を表現

独創的で誰もが楽しめる よさこいの魅力

第12代の誇咲は、YOSAKOIソーラン祭りだけでなく、神奈川県内や日本各地のよさこい祭りで受賞するなど高い評価を受けました。地方遠征が多いので、学業やアルバイトとの両立が大変ですが、そんな苦労も学生である今しかできない経験。皆で助け合い、楽しみながら完全燃焼できたと語るお二人に、よさこいの魅力やサークル活動で得たことを聞きました。

こどもの頃によさこいをやっていた鈴木さんは、「大学でよさこいに再挑戦したい」と思い、関東学院大学に進学しました。誰でも踊りやすく、お客様との距離も近いので、皆が一体となって楽しめますし、独創的な和の世界とダイナミックな音楽の取り合わせも魅力です。サークル活動では大変なこともありましたが、大学生活はもちろん、これまでの人生の中でも一番頑張れたと自信を持って言えますし、



本当に入って良かったと思います」と笑顔を見せます。
大学でよさこいと出会った松本さんは、「全てが魅力ですが、僕は特に衣装に惹かれて、よさこいを始めるきっかけになりました。華やかでチームごとに個性があつて、衣装を見るだけでも面白いですね。サークルの先輩後輩はもちろん、お祭りの運営の方々や他チームの方々など多くの人と関わったことも大きな財産になりました」と話しました。



華やかな誇咲の衣装

ル「誇咲（ほこさき）」が出場しました。誇咲は6月8日と9日の2日間参加し、8つの会場で2024年度の演舞（零桜（れお））を披露。10回参加を記念した「感謝状」、サッポロガーデンパーク会場での演舞に対してポッカサッポロ北海道株式会社より「ポッカサッポロ賞」、大通りパレード会場にて「敢闘賞」など3つの賞を受賞しました。

楽しむことを追求して 作り上げた演舞（零桜）

誇咲は、「大学生活で誇れるものを残したい」「皆で華やかな思い出を作りたい」という思いから2011年に結成。現在約70人が所属する、国内最大の公認サークルです。「小さな一歩が大きな進歩」をチームコンセプトに、北海道から大阪まで、日本各地のよさこい祭りに出場しています。

毎年、新作の演舞と衣装を制作し、高みを目指している誇咲。2024年度の演舞（零桜）は、「全力で楽しむ！」をテーマに、踊り手はもちろん、観客も一緒に楽しめるような作品を追求。活気と笑顔が溢れる演舞で会場を盛り上げ、複数の受賞に繋がりました。

誇咲12代目の代表で、振り付けも担当した鈴木悠莉さん（国際文化学部比較文化学科3年）は、「私達12代が中心となって作り上げた演舞（零桜）を初披露した

喜びも悔しさも繋げて さらなる飛躍へ

11月の学園祭をもって12代目は引退となり、残る大学生活で卒業研究や就職活動に専念するお二人。最後に一番の思い出を尋ねると、ともに同じお祭りの名を挙げました。毎年9月に新潟県で開催される「にいがた総おどり」です。

「学生でも賞が取れる可能性があるお祭り」で、前年度初めて参加しましたが、入賞には至りませんでした。先輩達の悔しさも知っているのですが、今年度こそは本気で挑んだものの、またしても手が届きませんでした。ただ、それ以上に、そこに向けて皆で頑張れたことや、一緒に最高の景色を見て涙を流せたことが良い思い出です。後輩達には、次こそは受賞してねと気持ちを託しました」

誇咲は現在、13代目を中心となり新たな演舞の制作に取り組んでいます。果たしてどんな演舞を見せてくれるのか。これから誇咲の活躍にご注目ください。



衣装も見所の一つ



関東学院大学 よさこいソーランサークル「誇咲」

代表 鈴木 悠莉さん（左）国際文化学部比較文化学科3年

副代表 松本 京也さん（右）建築・環境学部建築・環境学科3年



誇咲 2024 年度
演舞（零桜）動画

本場ハワイで開催されたフラ国際大会で 関東学院大学経営学部が4位入賞の快挙

憧れの舞台に初挑戦
外国人唯一の入賞者に

関東学院大学経営学部1年の田中琉空（りく）さんが、昨年8月にハワイで開催されたフラの主要国際大会「フラ・オニ・エ」に出場し、カヒコ（古典フラ）部門の男性ソロで4位に入賞しました。この大会は長年ハワイのハラウ（フラ教室）に愛されているコンペティションで、30周年の記念大会となった昨年は6か国から過去最多の踊り手が参加しました。田中さんは同年3月に開催された日本予選大会で優勝し、日本代表としてハワイの本大会に出場。同部門で外国人として唯一の入賞を果たしました。ハワイ語で「踊り」を意味するフラは、楽



器演奏や詠唱などを含んだ総合芸術であり、ハワイの文化・歴史や神々への感謝を表現しています。カヒコ（古典フラ）とアウアナ（現代フラ）の二つに大別され、田中さんが踊ったカヒコは文化的要素が強く、打楽器のみの演奏とハワイ語の詠唱による荘厳な表現が特徴です。そのためハワイ語の正確性が大きな審査基準となり、外国人の入賞は難しいとされています。田中さんが披露したのは、16世紀頃にオアフ島を統治していたと言われる現在の王「カクヒヘヴァ」を語り継ぐ歌と踊りです。打楽器のリズムに乗って、抑揚あるハワイ語の詠唱や力強いパフォーマンス、豊かな表情などが高い評価を受けました。「偉大な王の物語なので威厳ある表情を心がけました。出場者では僕一人だけ10代で一番若かったので、あえて体力を要するパートを踊ったことも評価に繋がったと思います。初の国際大会で、日本人には難しいと言われていたカヒコで4位入賞でき本当に嬉しかったです」と語る田中さん。当日は家族も会場で応援してくれたそうで、「踊り終えた後、父が泣いている姿を初めて見ました。ずっとサポートしてくれた両親には感謝の気持ちでいっぱいです」と振り返ります。



表彰式で晴れやかな表情を見せる田中さん

フラが盛んな茅ヶ崎市出身の田中さんは、小1からタヒチアンダンス、小4からフラを始めました。コロナ禍を経た昨年3月、こどもの頃からの夢だったフラ・オニ・エの日本予選大会に初挑戦し、見事優勝。8月の本大会に向けてボイストレーニングと踊りの強化に励みました。「大学入学と重なり、学業との両立が本当に大変でしたが、諦めずに頑張ってきたので」と語る表情からは達成感と自信が伝わってきました。

フラ関連のイベントにダンサーやスタッフとしても参加している田中さん。将来は自身でイベントを立ち上げて人を笑顔にし



経営学部 経営学科1年
田中 琉空 さん

たいと考え、実社会で学べる社会連携プラットフォーム「K・b・i・z」を展開している関東学院大学経営学部に入學しました。フラにおける今後の目標は、「大学在学中に、フラ最高峰の大会であるメリー・モナーク・フェスティバルに出場することです」と語ります。ハワイ出身者以外の出場枠には厳しい制限があるため、様々な国際大会で経験を積んで出場権を得たいとのこと。これからも田中さんの挑戦は続いています。

関東学院高等学校将棋部の生徒が 全国高等学校将棋選手権大会で3位入賞

高校生活最後の夏
個人戦で全国ベスト4入り

昨夏に岐阜県で開催された第48回全国高等学校総合文化祭。その将棋部門である「第60回全国高等学校将棋選手権大会」が同県高山市で行われ、関東学院高等学校3年で将棋部部長の水野蒼人さんが男子個人戦で全国3位になりました。

この大会は男女ともに個人戦と団体戦があり、個人戦は各都道府県から2名（開催地及び前年度優勝の都道府県は3名）しか出場できない狭き門。なかでも神奈川県は全国レベルの強豪がひしめく激戦区です。「神奈川県予選は、全国優勝を目指すためには絶対に越えなければならない壁。厳しい戦いを経験できるという意味ではアドバンテージになります」と言う水野さんは、2年連続で県予選を通過。全国大会で前年度のベスト16を上回る好成績を収めました。

全国大会では初日の予選リーグを3勝1敗で通過し、上位30名による決勝トーナメントに駒を進めた水野さん。予選の初戦から3連勝したことで、メンタル的にも余裕を持てたそうです。決勝トーナメントでは、優勝候補が1回戦で敗退するなど厳し



い勝負が繰り広げられる中、順調に2回戦を突破。2日目の準々決勝では強敵の広島代表と対戦し、前半の劣勢を跳ね返して逆転勝利を収めました。準決勝では沖縄代表と対戦。混戦が続いたものの、最後は惜しくも敗退という結果に。「あと一歩で競り負けました。絶対優勝するという意気込みで臨んだ大会だったので、3位という結果は名誉なことではありますが、いまだに悔しさが残ります」と胸中を語ります。

一手が勝負を分けるのが将棋の面白さであり、怖さです。「負けを受け入れてどう改善するかが大切。それを克服できれば、人としても成長できると考えています」と水野さん。大会には顧問の先生と、現在は退

職された恩師も駆けつけてくれ、大きな力になったそうです。

将棋を始めたのは関東学院小学校2年生の頃。最初はチェスに興味を持ち、その日本版とも言える将棋と出会いました。「将棋には答えがなく、一人でどこまでも考え続けることができます。今はコンピュータが最適解を導き出したりしますが、その手に至るまでの過程は果たして人間が読めるものなのか、そして自分の技術で指し切れる上での最善手とは何かと考えていくと、本当に奥が深いです」と魅力を語ります。

水野さんの棋風は、穏やかな口調とは裏腹に、非常に攻撃的なのだそう。「私は受ける将棋が苦手なので、リスクは承知の上で勇氣を持って踏み込まないと勝てません。だから、他の人達が怖くてできない踏み込み方もするので、周りからはデストロイヤーと呼ばれたりします」と明かします。今後の目標は「アマチュアの大会で一度でもいいから全国優勝したい。大学では学業も忙しくなっていますが、続けられる限りは将棋を続けたいと思います」と話してくれました。

同校将棋部は、団体戦でも県予選ベスト4と全国まであと一歩のところに来ていま

す。水野さんは今春卒業しますが、これからもできる限り後輩達をサポートしたいとのこと。今後も同校将棋部の活躍に期待しています。



関東学院高等学校3年 将棋部部長 水野 蒼人 さん

関東学院テーマ募金第6期のご案内

2013年4月に創設した「関東学院テーマ募金」も第6期を迎えます。

大学では教育・研究活動、学生支援の目的別に、各校・各園においては特徴的な教育活動、長期的な資金準備が必要なテーマを掲げ、ご支援を募っております。

皆様からの篤志により、取り組みを進めさせていただくとともに、

校訓「人になれ 奉仕せよ」のもと、人と社会に、そして未来と幸福に貢献できる、愛に溢れた人材を育成していく所存です。

募金対象者

卒業生、保護者、教職員、同窓会、企業、団体の皆様ほか

募金期間

2025年4月1日から2028年3月31日までの3年間

※寄付ホームページからクレジット、ペイジー、コンビニ決済での支払いに加えてQRコード決済(PayPay)での寄付も出来るようになりました。右記のQRコードよりお申込みが可能です。



関東学院

関東学院テーマ募金 お問い合わせ

学校法人関東学院 募金・校友課
〒236-8501

横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL 045-786-2685

FAX 045-786-5729

Mail bokin@kanto-gakuin.ac.jp

Web 芳名録について

テーマ募金へ10万円以上の寄付者には、寄付ホームページへWeb芳名録として掲載させていただきます。

Web芳名録は、関東学院テーマ募金の期ごとに掲載いたします。

税制上の優遇措置について

学校法人関東学院に対する寄付は、特定公益増進法人への寄付金として、寄付金控除の措置を受けることができます。

※入学(園)された年内に新入生保護者及び新入生が寄付された場合は、

「入学に係わる寄付金」とみなされて寄付金控除の対象になりませんので、ご注意ください。

東名高速道路 東海道新幹線

横浜市

関東学院中学校高等学校
☎ 045-231-1001
関東学院小学校
☎ 045-241-2634

関東学院大学
☎ 045-781-2001(代)
● 横浜・関内キャンパス
法学部／経営学部
人間共生学部 コミュニケーション学科
大学院(経済学研究科 経営学専攻／
法学研究科)

関東学院大学のびのび園
☎ 045-845-0876

鎌倉市

関東学院大学
☎ 045-781-2001(代)
● 横浜・金沢文庫キャンパス

逗子市 葉山町

関東学院大学
☎ 045-781-2001(代)
● 横浜・金沢八景キャンパス
☎ 045-786-7002
国際文化学部／社会学部／経済学部／理工学部
建築・環境学部／人間共生学部 共生デザイン学科
教育学部／栄養学部／看護学部
大学院(文学研究科／経済学研究科 経済学専攻
工学研究科／看護学研究科)

関東学院六浦中学校・高等学校
☎ 045-781-2525

関東学院六浦小学校
☎ 045-701-8285

関東学院六浦こども園
☎ 045-781-0170

学校法人
関東学院
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
法人事務局 ☎ 045-786-7028(代)
<https://www.kanto-gakuin.ac.jp/>